

ID No.	1013
研究課題名	進行口腔扁平上皮癌に対する第三世代がん治療用単純ヘルペスウイルス I 型を用いたウイルス療法の効果の検討
研究代表者	古郷 幹彦 (大阪大学・教授)
研究組織 受入教員 研究分担者	藤堂 具紀 (東京大学医科学研究所・教授) 内橋 俊大 (大阪大学・医員) 須河内 昭成 (大阪大学・医員) 相川 友直 (大阪大学・講師) 宮川 和晃 (大阪大学・医員) 中原 寛和 (大阪大学・招聘教員)
研究報告 藤堂らが新たに開発した免疫賦活化因子(マウス可溶性B7-1, マウスIL-12)発現型第三世代がん治療用HSV-1 (T-B7-1, T-mfIL-12) を用いて、 <i>in vitro</i> , <i>in vivo</i> における殺細胞効果の検討を行っている。これらのウイルスは、 <i>in vitro</i> において、コントロールウイルスであるT-01と比較し、Vero細胞やマウス扁平上皮癌細胞 (SCCVII, KLN205-MUC1) に対して同等の殺細胞効果を示すのに対し、 <i>in vivo</i> での皮下腫瘍モデル、舌がんモデルにおいてはT-01よりさらに強い抗腫瘍効果を示すことがわかった。特にKLN205-MUC1舌がんモデルにおいて、リンパ節転移巣の増大のみに着目したモデルを作成したところ、T-01に比して、T-B7-1は有意なリンパ節転移抑制効果を示すことがわかった。このことは、リンパ節転移を高頻度に起こし、患者の予後に大きな影響を与える口腔癌において、極めて有効ながん治療用ウイルスである可能性が示唆された。現在、SCCVII をもちいた新たな顎骨浸潤モデルを開発し、口腔癌に頻発する骨浸潤に対する第三世代がん治療用 HSV-1 の効果を検討中である。	